

曹洞宗勤行

○
○
寺

目次

開經偈／懺悔文／三歸礼文／三歸依文／三尊礼文

摩訶般若波羅蜜多心經／本尊上供回向文／四弘誓願文

大悲心陀羅尼／普門品偈／寿量品偈

仏垂般涅槃略説教誡經／消災呪／十句觀音經

舍利礼文／甘露門／參同契／宝鏡三昧／修証義

普回向／在家略回向／普勸坐禅儀／食事の偈

開かい經きよう偈げ

無む上じよう甚じん深じん微み妙みよう法ほう

百ひやく千せん万まん劫ごう難なん遭そう遇ぐう

我が今こん見けん聞もん得とく受じゆ持じ

願がん解げ如によらい來しん真じつ實ぎ義ぎ

懺悔文 さんげもん

我昔所造諸惡業 がしやくしよぞうしよあくごう

皆由無始貪瞋癡 かいゆうむしとんじんち

從身口意之所生 じゆうしんくういししよしやう

一切我今皆懺悔 いっさいがこんかいさんげ

三歸礼文 さんきらいもん

自歸依仏 じきえぶつ

当願衆生 とうがんしゅじょう

体解大道 たいげだいどう

発無上意 ほつむじょうい

自歸依法 じきえぼう

当願衆生 とうがんしゅじょう

深入經藏 じんにゆうきやうぞう

智慧如海 ちえにょかい

自歸依僧 じきえそう

当願衆生 とうがんしゅじょう

統理大衆 とうりだいしゅう

一切無礙 いっさいむびげ

三歸依文 (三歸戒文)

南無歸依仏

南無歸依法

南無歸依僧

歸依仏無上尊

歸依法離塵尊

歸依僧和合尊

歸依仏竟

歸依法竟

歸依僧竟

三尊礼文 さんぞんらいもん

南無大恩教主本師釈迦牟尼仏 なむだいおんきょうしゅほんししやかむにぶつ

南無高祖承陽大師 なむこうそじょうようだいし

南無太祖常濟大師 なむたいそじょうさいだいし

南無大慈大悲哀愍摂受 なむだいたいざだいひあいみんしょうじゆ

生生世世值遇頂戴 しやうしやうせせちぐうちやうだい

摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。
度一切苦厄。舍利子。色不異空。空不異色。色即是
空。空即是色。受想行識。亦復如是。舍利子。是諸
法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。是故空
中。無色無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色声香味
觸法。無眼界乃至無意識界。無無明亦無無明尽。乃

至し無む老ろう死し。亦やく無む老ろう死し尽じん。無む苦く集じゅう滅めつ道どう。無む智ち亦やく無む得とく。
 以い無む所しょ得とく故こ。菩ぼ提だい薩さつ埵た。依え般はん若にや波は羅ら蜜み多た故こ。心しん無む罣け
 礙げ。無む罣け礙げ故こ。無む有う恐く怖ふ。遠おん離り一い切っ顛てん倒どう夢む想そう。究く竟ぎょう
 涅ね槃はん。三さん世ぜ諸しよ仏ぶつ。依え般はん若にや波は羅ら蜜み多た故こ。得とく阿あ耨のく多た羅ら三さん
 藐みやく三さん菩ぼ提だい。故こ知ち般はん若にや波は羅ら蜜み多た。是ぜ大だい神しん呪じゆ是ぜ大だい明みょう呪じゆ。
 是ぜ無む上じょう呪じゆ。是ぜ無む等とう等じゆ呪じゆ。能のう除じよ一い切っ苦く。真しん實じつ不ふ虛こ。故こ
 說せつ般はん若にや波は羅ら蜜み多た呪じゆ。即そく說せつ呪じゆ曰わつ。羯ぎや諦てい。羯ぎや諦てい。波は羅ら羯ぎや
 諦てい。波は羅ら僧そう羯ぎや諦てい。菩ぼ提だい薩さつ婆わ訶か。般はん若にや心しん經ぎょう。

本尊上供回向文

上来、摩訶般若波羅蜜多心經を諷誦する功德は、大
恩教主本師釈迦牟尼仏、高祖承陽大師、太祖常濟大
師に供養し奉り、無上仏果菩提を莊嚴す。伏して願
わくは四恩総て報じ、三有齊しく資け、法界の有情
と、同じく種智を円かにせんことを。

冀こいねがう所ところは、家門かもん繁栄はんえい、子孫しそん長久ちやうきゆう、災障さいしやう消除しやうじよ、諸縁しよえん吉きち
祥じやうならんことを。

十方じふほ三世さんせい一切いっせ仏ぶつ
諸尊しよそん菩薩ぼさつ摩訶まか薩さつ
摩訶まか般若ぼんげ波羅ばら密みつ

〔略三宝〕

四し弘ぐ誓せい願がん文もん

衆しゅじょう生じょう無む辺へん誓せい願がん度ど

煩ぼんのう惱のう無む尽じん誓せい願がん断だん

法ほう門もん無む量りょう誓せい願がん学がく

仏ぶつ道どう無む上じょう誓せい願がん成じょう

大悲心陀羅尼
(大悲呪)

南無喝囉怛那。哆囉夜耶。南無阿唎耶。婆盧羯帝灑
盜囉耶。菩提薩哆婆耶。摩訶薩哆婆耶。摩訶迦嚧尼
迦耶。唵。薩皤囉罰曳數怛那怛写。南無悉吉唵埵伊
蒙。阿唎耶。婆盧吉帝。室仏囉。楞駄婆。南無那
囉。謹墀醯唎。摩訶皤哆。沙咩薩婆。阿他豆輸朋。
阿遊孕。薩婆薩哆。那摩婆伽。摩罰特豆。怛姪他。
唵。阿婆盧醯。盧迦帝。迦羅帝。夷醯唎摩訶。菩提

薩埵さうと。薩婆薩婆さうばさうば。摩囉摩囉もらもら。摩醯摩醯もぎもぎ。唎馱孕俱盧りといんくりよ
 俱盧くりよ。羯蒙度盧度盧けもとりよとりよ。罰闍耶帝ほじやち。摩訶罰闍耶帝もこほじやち。陀
 囉陀囉らとら。地唎尼ちりに。室仏囉耶しらや。遮囉遮囉しゃろしゃろ。麼麼罰摩
 囉ら。穆帝隸ほちり。伊醯伊醯いきい。室那室那しのし。阿囉唵おらん。佛囉舍
 利り。罰沙罰唵はざん。仏囉舍耶ぶらしゃや。呼盧呼盧くりよくりよ。摩囉呼盧呼
 盧りよ。醯唎婆囉婆囉きりりしゃろしゃろ。悉唎悉唎しりりしりり。蘇嚧蘇嚧すりよすりよ。菩提夜ふじや
 菩提夜ふじや。菩馱夜ふどや。菩馱夜ふどや。彌帝唎夜みちりや。那囉謹墀のらきんじ。地唎
 瑟尼那しゆにの。婆夜摩那ほやもの。娑婆訶そもこ。悉陀夜しどや。娑婆訶そもこ。摩訶
 悉陀夜しどや。娑婆訶そもこ。悉陀唵芸しどゆき。室幡囉耶しふらや。娑婆訶そもこ。那

囉謹墀らきんじい。娑婆訶そもこー。摩囉那囉娑婆訶もーらーのーらーそもこー。悉囉僧阿穆佉しらすーおもぎやー
 耶やー。娑婆訶そもこー。娑婆摩訶悉陀夜そぼもこしどやー。娑婆訶そもこー。者吉囉阿悉しゃきらーおし
 陀夜どーやー。娑婆訶そもこー。波哆摩羯悉哆夜ほどもぎやしどやー。娑婆訶そもこー。那羅謹墀のらきんじい
 幡伽羅耶はーぎやらやー。娑婆訶そもこー。摩婆利勝羯羅耶もーほりしんぎやらやー。娑婆訶そもこー。
 南無喝囉怛那哆囉耶夜なむからたんのうとらやーやー。南無阿唎耶なむおりやー。婆盧吉帝ぼりよきちー。爍し
 幡囉夜ふらーやー。娑婆訶そもこー。悉殿都漫多囉してどーもどら。跋陀耶ぼどやー。娑婆訶そもこー。

普門品偈

世尊妙相具

我今重問彼

仏子何因縁

名為觀世音

具足妙相尊

偈答無尽意

汝聽觀音行

善応諸方所

弘誓深如海

歴劫不思議

侍多千億仏

発大清浄願

我為汝略説

聞名及見身

心念不空過

能滅諸有苦

仮使興害意

推落大火坑

念彼觀音力

火坑變成池

或漂流巨海

竜魚諸鬼難

念彼觀音力

波浪不能没

或在須弥峰

為人所推墮

念彼觀音力

如日虚空住

或わく被ひ惡あく人にん逐ちく

墮だ落らく金こん剛ごう山せん

念ねん彼び觀かんの音のん力りき

不ふ能のう損そん一いち毛もう

或わく值ち怨おん賊ぞく繞りょう

各かく執しゅう刀とう加か害がい

念ねん彼び觀かんの音のん力りき

咸げん即そく起き慈じ心しん

或わく遭そう王おう難なん苦く

臨りん刑ぎょう欲よく壽じゅう終しゅう

念ねん彼び觀かんの音のん力りき

刀とう尋じん段だん段だん壞えい

或わく囚しゅう禁きん枷か鎖さ

手しゅう足そく被ひ被ちゅう杻かい械かい

念ねん彼び觀かんの音のん力りき

釈しゃく然ねん得とく解げ脫だつ

呪しゅう詛そ諸しゅう毒どく藥やく

所しよ欲よく害がい身しん身しや者者

念ねん彼び觀かんの音のん力りき

還げん著じやく於お本ほん人にん

或わく遇ぐう惡あく羅ら刹せつ

毒どく竜りゅう諸しよ鬼き等とう

念ねん彼び觀かんの音のん力りき

時じ悉しつ不ふ敢かん害がい

若にやく惡あく獸じゅう困い繞りょう

利り牙げ爪そう可か怖ふ

念ねん彼び觀かんの音のん力りき

疾しつ走そう無む辺へん方ぼう

蚺がんに蛇やぎ及ゆう蝮ぶつ蠍かつ

氣け毒どく煙えん火か燃ねん

念ねん彼び觀かんの音のん力りき

尋じん声しやう自じ回え去こ

雲うん雷らい鼓いく掣せい電でん

降ごう雹ばく澍じゅう大だい雨う

念ねん彼び觀かんの音のん力りき

応おう時じ得とく消しやう散さん

衆生被_レ困厄しゅじやうひーこんやく

無量苦逼身むりやうくーひつしん

觀音妙智力かんのんみやうちーりき

能救世間苦のうぐーせーけんくー

具足神通力ぐーそくじんずうりき

広修智方便こうしゅいちーほうべん

十方諸国土じつぱうしよーこくど

無刹不現身むーせつふーげんしん

種種諸惡趣しゅじゅーしよーあくしゅー

地獄鬼畜生じーごくきーちくしやう

生老病死苦しやうろうびやうしーく

以漸悉令滅いーぜんしつりやうめつ

真觀清淨觀しんかんしやうじやうかん

廣大智慧觀こうだいちーえーかん

悲觀及慈觀ひーかんぎゆうじーかん

常願常瞻仰じやうがんにしやうせんごう

無垢清淨光むーくーしやうじやうこう

慧日破諸闇えーにちはーしよーあん

能伏災風火のうぶくさいふうか

普明照世間ふーみやうしやうせーけん

悲体戒雷震ひーたいかいらいしん

慈意妙大雲じーいーみやうだいうん

澍甘露法雨じゅーかんろーほうう

滅除煩惱燄めつじよーぼんのうえん

諍訟經官処じやうしやうきやうかんしよー

怖畏軍陣中ふーいーぐんじんちゆう

念彼觀音力ねんびーかんのんりき

衆怨悉退散しゅーおんしつたいさん

妙音觀世音みやうおんかんぜーおん

梵音海潮音ぼんのんかいちやうおん

勝彼世間音しやうひーせーけんおん

是故須常念ぜーこーしゅーじやうねん

念念勿生疑ねんねんもつしやうぎ

觀世音淨聖かんぜーおんじやうしやう

於苦惱死厄おーくーのうしーやく

能為作依怙のういーさーえーこ

具一切功德。慈眼視衆生。福聚海無量。是故應頂禮。
 爾時。持地菩薩。即從座起。前白仏言。世尊。若有
 衆生。聞是觀世音菩薩品。自在之業。普門示現。神
 通力者。當知是人。功德不少。仏説是普門品時。衆
 中八万四千衆生。皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提
 心。

じゅりようほんげ
寿量品偈

我がとくぶつらい 自我得仏来	しよきようしよこうしゅー 所経諸劫数	むりりようひやくせんまん 無量百千万	おくさいあーそうぎー 億載阿僧祇
じようせつぽうきようけー 常説法教化	むーしゅーおくしゅーじよう 無数億衆生	りようにゆうおーぶつどう 令入於仏道	にーらいむりりようこう 爾来無量劫
いーどーしゅーじようこー 為度衆生故	ほうべんげんねーはん 方便現涅槃	にーじつふーめつどー 而実不滅度	じようじゅうしーせつぽう 常住此説法
がーじようじゅうおーしー 我常住於此	いーしよーじんずうりき 以諸神通力	りようてんどうしゅーじよう 令顛倒衆生	すいごんにーふーけん 雖近而不見
しゅーけんがーめつどー 衆見我滅度	こうくーようしやーりー 広供養舍利	げんかいえーれんぼー 咸皆懷恋慕	にーしようかつごうしん 而生渴仰心
しゅーじようきーしんぶく 衆生既信伏	しつじきいーにゆうなん 質直意柔軟	いっしんよくけんぶつ 一心欲見仏	ふーじーしやくしんみやう 不自惜身命
じーがーぎゆうしゅーそー 時我及衆僧	ぐーしゅつりようじゅーせん 俱出靈鷲山	がーじーごーしゅーじよう 我時語衆生	じようざいしーふーめつ 常在此不滅
いーほうべんりきこー 以方便力故	げんぬーめつふーめつ 現有滅不滅	よーこくうーしゅーじよう 余国有衆生	くーぎようしんぎようしやー 恭敬信樂者

我復於彼中

為説無上法

汝等不聞此

但謂我滅度

我見諸衆生

没在於苦海

故不為現身

令其生渴仰

因其心戀慕

乃出為説法

神通力如是

於阿僧祇劫

常在靈鷲山

及余諸住処

衆生見劫尽

大火所燒時

我此土安穩

天人常充滿

園林諸堂閣

種種宝莊嚴

宝樹多華果

衆生所游樂

諸天擊天鼓

常作衆伎樂

雨曼陀羅華

散仏及大衆

我淨土不毀

而衆見燒尽

憂怖諸苦惱

如是悉充滿

是諸罪衆生

以惡業因縁

過阿僧祇劫

不聞三宝名

諸有修功德

柔和質直者

そくかいけんがーしん
則皆見我身

ざいしーにーせつぽう
在此而説法

わくじーいーしーしゅー
或時為此衆

せつぶつじゅーむーりやう
説仏壽無量

くーないけんぶつしやー
久乃見仏者

いーせつぶつなんちー
為説仏難値

がーちーりきによーぜー
我智力如是

えーこうしやうむーりやう
慧光照無量

じゅーみやうむーしゅーこう
壽命無數劫

くーしゅーごうしやーとく
久修業所得

によーとーうーちーしやー
汝等有智者

もつとーしーしやうぎー
勿於此生疑

とうだんりやうようじん
当断令永尽

ぶつごーじつふーこー
仏語実不虛

によーいーぜんほうべん
如医善方便

いーじーおうしーこー
為治狂子故

じつざいにーごんしー
實在而言死

むーのうせつこーもつ
無能説虚妄

がーやくいーせーぶー
我亦為世父

ぐーしよーくーげんしやー
救諸苦患者

いーぼんぶーてんどう
為凡夫顛倒

じつざいにーごんめつ
實在而言滅

いーじやうけんがーこー
以常見我故

にーしやうきやうしーしん
而生憍恣心

ほういつじやくごーよく
放逸著五欲

だーおーあくどうちゆう
墮於惡道中

がーじやうちーしゅーじやう
我常知衆生

ぎやうどうふーぎやうどう
行道不行道

ずいおうしよーかーどー
隨応所可度

いーせつしゅーじゅーほう
為説種種法

まいじーさーぜーねん
每自作是念

いーがーりやうしゅーじやう
以何令衆生

とくにゆうむーじやうどう
得入無上道

そくじやうじゅーぶつしん
速成就仏身

仏垂般涅槃略説教誡經

釈迦牟尼仏、初に法輪を転じて、阿若憍陳如を度し、最後の説法に須跋陀羅を度したもう。応に度すべき所の者は、皆已に度し訖つて、娑羅双樹の間に於て、將に涅槃に入りたまわんとす。是の時中夜寂然として声無し、諸の弟子の爲めに略して法要を説きたもう。

汝等比丘、我が滅後に於て、当に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし。闇に明に遇い、貧人の宝を得るが如

し。当まさに知しるべし、此これは即すなわち是これ汝等なんだちが大師だいしなり。若もし我われ世よに住じゆうするとも、此これに異ことなること無なけん。淨じようかい戒たいを持たもたん者は、販ばん売まい貿易むやくし、田でん宅たくを安あん置ちし、人民にんみん奴婢ぬび畜ちく生しようを畜ちく養ようすることを得えざれ。一切いっさいの種しゆ植じき及および諸もろの財ざい宝ほう、皆みな当まさに遠おん離りすること火か坑きようを避さくるが如ごとくすべし。草そう木もくを斬ざん伐ばつし、土どを墾たがし地ちを掘ほり、湯とう薬やくを合ごう和わし、吉きつ凶きうを占せん相そうし、星しやう宿しゆくを仰ごう觀かんし、盈よう虚こを推すい歩ほし、曆りやく数しゆ算さん計けいすることを得えざれ、皆みな応おうぜざる所ところなり。身みを節せつし時ときに食じきして、清しやう淨じようにして自じ活かつせ

よ。世事せじに参預さんよし、使命しみよを通知つうちし、呪術しゅじゆつし、仙薬せんやくし、好よしみを貴人きにんに結むすび、親厚しんこう媒慢せつまんすることを得えざれ、皆作みなさに応おうぜず。当まさに自みずから端心たんしん正念しやうねんにして度どを求もとむべし。瑕疵けしを包藏ほうざうし、異いを顕あらわし衆しゆを惑まどわすことを得えざれ、四供養しきように於おいて量りようを知しり足たることを知しるべし。趣わずかに供事くじを得えて、蓄積ちくしやくす應べからず。此これ即すなわち略りやくして持戒じかいの相そうを説とく。戒かいは是これ正順しやうじゆん解脱げだつの本もとなり、故かゝるに波羅提木叉はらだいもくしやと名なづく。此この戒かいに依え因いんすれば、諸もろもろの禅定ぜんじやう及および滅苦めつくの智慧ちえを生しやうずることを得う。是この故ゆえ

比丘びく当まさに淨戒じようかいを持たもつて、毀欠きけつせしむること勿なかるべし。若もし人ひと能よく淨戒じようかいを持じすれば、是これ則すなわち能よく善法ぜんぼうあり。若もし淨戒じようかい無なければ、諸善しよぜんの功徳くどく皆みな生なずることを得えず。是これを以もつて当まさに知しるべし、戒かいは第一だいいち安穩あん功徳くどくの所住しよじゆう処しよたることを。汝等なんだち比丘びく、已すてに能よく戒かいに住じゆうす。当まさに五根ごこんを制せいすべし、放逸ほういつにして五欲ごよくに入いらしむること勿なかれ。警たどえば牧牛ぼくごの人ひとの杖つえを執とつて、之これを視みせしめて、縦逸じゆういつにして人ひとの苗稼みょうけを犯おかさしめざるが如ごとし。若もし五根ごこんを縦ほしいま

にすれば、唯ただ五欲ごよくの将まさに涯畔がいはん無のうして制せいす可べからざるの
みにあらず。亦またた悪馬あくめの轡くつわづらを以もつて制せいせざれば、将当まさ
に人ひとを牽ひきいて、坑陷きようかんに墜おとさんとするが如ごとし。劫害ごうがいを
被こむるが如ごときんば、苦く一世いつせに止とどまる。五根ごこんの賊ぞくは禍か
殃累おうるい世せに及およぶ、害がいたること甚はなはだ重おもし、慎つつしまずんばあ
るべからず。是この故ゆえに智ち者しやは制せいして而しかも随したがわず。之これ
を持じすること賊ぞくの如ごとくにして、縦逸じゆういつならしめざれ。
仮令たといこれ之ほしいままを縦ほしいままにすると、皆みな亦またた久ひさしからずして其その
磨滅まめつを見みん。此この五根ごこんは心しんを其その主しゆと為なす。是この故ゆえ

に汝等当なんだちまさに好よく心しんを制せいすべし。心しんの畏おそるべきこと毒どく蛇じや、悪獸あくじゆう、怨賊おんぞくよりも甚はなはだし。大火たいかの越逸おついつなるも、未いまだ喻たとえとするに足たらず。譬たとえば人ひとあつて手てに密器みつぎを執とつて、動どう転てん輕きやう躁そうして、但ただ蜜みつのみを觀みて、深坑じんきやうを見みざるが如ごとし。又またた狂象かうざうの鈎かぎなく、猿猴えんこうの樹きを得えて騰躍とうやく踔躑ちゆうちやくして、禁制きんせいすべきこと難かたきが如ごとし。当まさに急きゆうに之これを挫とりひしいて、放逸ほういつならしむること無なかるべし。此この心しんを縦ほしにすれば、人ひとの善事ぜんじを喪うしう。之これを一處いっしょに制せいすれば、事こととして弁べんぜずということ無なし。是この故ゆえに

比丘びくまぎ当つとに勤しやうじんめて精進しやうじんして、汝なんじが心しんを折伏しやくぶくすべし。

汝等なんだち比丘びく、諸もろもろの飲食おんじきを受けては、当まさに薬くすりを服ふくするが

如ごとくすべし。好よきに於おいても、悪あしきに於おいても、増減ぞうげんを

生しやうずること勿なかれ。趣わずかに身みを支ささえることを得えて以もつて飢き

渴かつを除のぞけ。蜂はちの華はなを採とるに、但ただ其その味あじわいのみを取とつ

て、色香しきこうを損そんせざるが如ごとし。比丘びくも亦また爾しかなり、人ひと

の供養くやうを受けうて趣わずかに自みずから悩のうを除のぞけ、多おほく求もとめて其そ

善心ぜんしんを壊えすることを得うること無なかれ。譬たとえば智ち者しやの牛ご

力りきを堪たうる所ところの多た少しやうを籌量ちゆうりやうして、分ぶんに過すごして以もつて、

其その力ちからを竭つくさしめざるが如ごとし。

汝等なんだち比丘びく、昼ひるは則すなわち勤心ごんしんに善法ぜんぼうを修習しゆじゆうして、時ときを失しつ

せしむること無なれ。初夜しよやにも後夜ごやにも亦また麁はいするこ

と有あること勿なか。中夜ちゆうやに誦經じゆきようして以もつて自みづから消息しようそくせ

よ。睡眠すいみんの因縁いんねんを以もつて一生空いっしようくわしく過すごして所得しよとくなから

しむること無なか。当まさに無常むじようの火ひの諸もろもろの世間せけんを焼やくこ

とを念ねんじて、早はやく自度じどを求もとむべし。睡眠すいみんすること勿なか

れ、諸もろもろの煩惱ぼんのうの賊ぞく、常つねに伺うかがつて人ひとを殺ころすこと、怨家おんけ

よりも甚はなはだし。安いずくんぞ睡眠すいみんして自みづから警寤きようごせざる可べけ

んや。煩惱ぼんのうの毒蛇どくじゃ、眠ねむつて汝なんじが心むねに在あり、譬たとえば黒虻こくがんの汝なんじが室しつに在あつて眠ねむるが如ごとし。当まさに持戒じかいの鈎かぎを以もつて早く之これを屏除びようじよすべし。睡蛇すいじゃ既すでに出いでなば乃すなわち安眠あんみんすべし。出いでざるに而しかも眠ねむるは是これ無慙むざんの人ひとなり。慙ざん恥ちの服ふくは諸もろもろの莊嚴しょうごんに於おいて最もつとも第一だいいちなりとす。慙ざんは鉄鈎てつこうの如ごとく、能よく人ひとの非法ひほうを制せいす。是この故ゆえに比丘びくつね常に当まさに慙ざん恥ちすべし、暫しばらくも替すつることを得うること勿なかれ。若もし慙ざん恥ちを離りすれば、則すなわち諸もろもろの功德くどくを失しつす。有う愧ぎの人ひとは則すなわち善法ぜんぽうあり。若もし無愧むぎの者ものは諸もろもろの禽獸きんじゆうと相異あいこと

なること無けん。

汝等比丘、若し人あり来つて節節に支解するとも、

当に自ら心を撮めて瞋恨せしむること無かるべし。

亦た当に口を護るべし、悪言を出すこと勿れ。若し

恚心を縦にすれば、則ち自ら道を妨げ、功德の利を

失す。忍の徳たること持戒苦行も及ぶこと能わざる

所なり。能く忍を行ずる者は、乃ち名づけて有力の

大人と為すべし。若し其れ悪罵の毒を歡喜し忍受し

て、甘露を飲むが如くすること能わざるものは、入

道智慧の人と名づけず。所以は何んとなれば、瞋恚の害は、則ち、諸の善法を破り、好名聞を壊す、今世後世の人、見んことを喜わず。当に知るべし、瞋心は猛火よりも甚だし。常に当に防護して、入ることを得せしむること勿るべし。功徳を劫むるの賊は瞋恚に過ぎたるは無し。白衣受欲非行動の人、法として自ら制すること無きすら、瞋猶お恕むべし。出家行道無欲の人にして、而も瞋恚を懐けるは甚だ不可なり。譬えば清涼の雲の中に霹靂火を起すは、所

応おうに非あらざるが如ごとし。

汝等なんだち比丘びく、当まさに自みずから頭こうべを摩なづべし。已すでに飾しき好こうを捨すて

て、壊え色じきの衣ころもを着ちやくし、応器おうきを執持しゆじして、乞こつを以もつて自じ

活かつす、自見じけん是かくの如ごとし。若もし憍慢きやうまん起おこらば、当まさに疾はやく之これ

を滅めつすべし。憍慢きやうまんを増長ぞうちようするは、尚なおお世俗せぞく白衣びやくの宜よろ

しき所ところに非あらず。何いかに況いわんや出家しゆつけ入道にゆうどうの人ひと、解脱げだつの為ため

めの故ゆえに、自みずから其その身みを降くだして而しかも乞こつを行ぎようずるをや。

汝等なんだち比丘びく、諂曲てんごくの心しんは道どうと相違そういす。是この故ゆえに宜よろしく

応まさに其その心しんを質直しつじきにすべし。当まさに知しるべし、諂曲てんごくは

但だ欺誑を為すことを。入道の人は則ち是の処なし。是の故に汝等宜しく応に端心にして質直を以て本と為すべし。

汝等比丘、当に知るべし、多欲の人は利を求むること多きが故に苦惱も亦た多し。少欲の人は無求無欲なれば則ち此の患無し、直爾に少欲すら尚お応に修習すべし。何に況んや、少欲の能く諸の功徳を生ずるをや。少欲の人は則ち諂曲して以て人の意を求むること無し。亦復諸根の爲めに牽れず。少欲を行ず

る者は、心則ち坦然として憂畏する所無し。事に触
れて余り有り、常に足らざることに無し。少欲ある者
は則ち涅槃あり。是れを少欲と名づく。
汝等比丘、若し諸の苦悩を脱せんと欲せば、当に知
足を観ずべし。知足の法は即ち是れ富樂安穩の処な
り。知足の人は地上に臥すと雖も、猶お安樂なりと
す。不知足の者は、天堂に処すと雖も亦た意に称わ
ず。不知足の者は富めりと雖も、而も貧しし。知足
の人は貧しと雖も而も富めり。不知足の者は常に五

欲よくの爲ために牽ひかれて。知足ちそくの者ものの爲ために憐愍れんみんせらる。是これを知足ちそくと名なづく。
汝等なんだち比丘びく、寂靜無爲じやくじやうむいの安樂あんらくを求めんと欲ほつせば、当まぎに憤鬧かいにようを離はなれて独処どくしよに閑居げんごすべし。靜処じやうしよの人ひとは、帝釈たいしやく諸天しよてんの共ともに敬重きやうじゆうする所ところなり。是この故ゆえに当まぎに己衆こしゆ他衆たしゆを捨すてて、空閑くうげんに独処どくしよして、滅苦めつくの本ほんを思おもうべし。
若もし衆しゆを樂ねごう者ものは則すなわち衆惱しゆのうを受うく、譬たとえば大樹だいじゆの衆しゆ鳥ちよう之これに集あつまれば、則すなわち枯折こせつの患うれいあるが如ごとし。世間せけんの縛著ばくじやくは衆苦しゆくに没ぼつす。譬たとえば老象ろうぞうの泥でいに溺おほれて、自みづから

出づること能わざるが如し。是れを遠離と名づく。
汝等比丘、若し勤めて精進すれば、則ち事として難
き者なし。是の故に汝等当に勤めて精進すべし。譬
えば少水の常に流れて、則ち能く石を穿つが如し。
若し行者の心数々懈廢すれば、譬えば火を鑽るに未
だ熱からずして而も息めば、火を得んと欲すと雖
も、火を得べきこと難きが如し。是れを精進と名づ
く。

汝等比丘、善知識を求め善護助を求むることは、不

忘念もうねんに如しくは無なし。若もし不ふ忘念もうねんある者ものは、諸もろもろの煩惱ぼんのうの賊ぞく、則すなわち入いること能あたわず。是この故ゆえに汝等なんだち常つねに当まに念ねんを摂おさめて心こころに在あるべし。若もし念ねんを失しつする者ものは則すなわち諸もろもろの功徳くどくを失しつす。若もし念力ねんりき堅強けんごうなれば、五欲ごよくの賊ぞくの中なかに入いると雖いえども、為ために害がいせられず。譬たとえば鎧よろいを著きて陣じんに入いれば、則すなわち畏おそるる所ところなきが如ごとし。是これを不ふ忘念もうねんと名なづく。

汝等なんだち比丘びく、若もし念ねんを摂おさむる者ものは心則こころすなわち定じように在あり。心こころ定じように在あるが故ゆえに能よく世間せけん生滅しやうめつの法相ほつそうを知る。是この故ゆえ

に汝等常に当に精進して、諸の定を修習すべし。若し定を得る者は心則ち散ぜず。譬えば水を惜める家の、善く提塘を治するが如し。行者も亦た爾なり、智慧の水の為めの故に、善く禅定を修して漏失せざらしむ。是れを名づけて定と為す。

汝等比丘、若し智慧あれば則ち貪著なし。常に自ら省察して失あらしめざれ。是れ則ち我が法中に於て能く解脱を得。若し爾らざる者は、既に道人に非ず、又た白衣に非ず、名づくる所なし。実智慧の者

は、則ち是れ老病死海を度る堅牢の船なり、亦た是
れ無明黑暗の大明灯なり、一切病者の良薬なり、煩
悩の樹を伐るの利斧なり。是の故に汝等、当に聞思
修の慧を以て、而も自ら増益すべし。若し人智慧の
照あれば、是れ肉眼なりと雖も、而も是れ明見の人
なり。是れを智慧と名づく。
汝等比丘、若し種種の戲論は其の心則ち乱る。復た
出家すと雖も、猶お未だ得脱せず。是の故に比丘当
に急に乱心戲論を捨離すべし。若し汝寂滅の樂を得

んと欲せば、唯当に善く戲論の患を滅すべし。是れ
を不戲論と名づく。

汝等比丘、諸の功徳に於て、常に當に一心に諸の放
逸を捨つること怨賊を離するが如くすべし。大悲世
尊所説の利益は、皆已に究竟す。汝等但だ將に勤め
て之を行ずべし。若しは山間、若しは空沢の中に於
ても、若しは樹下、閑処、静室に在つても、所受の
法を念じて忘失せしむること勿れ。常に當に自ら勉
めて精進して之を修すべし。為すこと無うして空し

く死せば、後に悔あることを致さん。我れは良医の
病を知て薬を説くが如し、服すと服せざるとは医の
咎に非らず。又た善く導くものの、人を善道に導く
が如し、之を聞いて行かざるは、導くものの過に非
らず。

汝等比丘、若し苦等の四諦に於て疑う所ある者は、
疾く之を問うべし。疑を懐いて決を求めざること得
ること無かれ。爾の時に、世尊、是くの如く三たび
唱えたもうに、人問いたてまつる者なし。所以は何

んとなれば、衆疑しゅううたがい無なきが故ゆえに。

時ときに阿菟楼駄あねるだ、衆しゆの心こころを觀察かんさつして、而しかも仏ほとけに白もうして

言もうさく、世尊せそん、月つきは熱あつからしむべく、日ひは冷ひやかなら

しむべくとも、仏ほとけの説ときたもう四諦しだいは、異いならしむ

べからず。仏ほとけの説ときたもう苦諦くたいは、實じつに苦くなり、樂らく

ならしむべからず。集しゅうは真まことに是これ因いんなり、更さらに異い因いん

なし。苦く若もし滅めつすれば即すなわち是これ因いん滅めつす、因いん滅めつするが

故ゆえに果滅かめつす。滅めつ苦くの道どうは實じつに是これ真道しんどうなり、更さらに余よ

道どうなし。世尊せそん、是この諸もろもろの比丘びく、四諦しだいの中なかに於おいて決定けつじよう

して疑うたが無なし。

此この衆しゅちゆう中に於おいて若もし所作しよさい未いまだ弁べんぜざる者ものあらば、仏ほとけの滅めつど度どを見て当まさに悲ひ感かんあるべし。若もし初はじめて法ほうに入いる者ものあれば、仏ほとけの所しよ説せつを聞きいて即すなわち皆みな得とく度どす。譬たとえば夜よる電でん光こうを見みて、即すなわち道みちを見みることを得うるが如ごとし。若もし所作しよさい已すでに弁べんじ已すでに苦く海かいを度わたる者ものは但ただ是この念ねんを作なすべし、世せ尊そんの滅めつど度ど一ひとえに何なんぞ疾すみなる哉やと。阿あ菟ぬ楼る駄だ、此この語ごを説といて、衆しゅちゆう中ちゆう皆みな悉ことごとく四し聖しやう諦たいの義ぎを了り達たつすと雖いえども、世せ尊そん此この諸もろの衆ちゆう大だい衆しゆをして皆みな堅けん固こな

ることを得せしめんと欲して、大悲心を以て復た衆
の爲めに説きたもう。

汝等比丘、悲悩を懐くこと勿れ。若し我れ世に住す
ること一劫するとも、会うものは亦た当に滅すべ
し。会うて而も離れざること終に得べからず。自利
利人の法は皆具足す。若し我れ久しく住するとも更
に所益なけん。応に度すべき者は、若しは天上人間
皆悉く已に度す。其の未だ度せざる者には、皆亦た
已に得度の因縁を作す。自今已後、我が諸の弟子、

展てんでん転てんして之これを行ぎようぜば、即すなわち是これ如によらい来らいの法ほつしん身つね常いまに在いまし
て而しかも滅めつせざるなり。是この故ゆえに当まさに知しるべし、世よは
皆みな無む常じようなり、会あうものは必かならず離はなるることあり。憂う
悩のうを懷いだくこと勿なかれ、世せ相そう是かくの如ごとし。当まさに勤つとめて精しよう進じん
して早はやく解げ脱だつを求もとめ、智ち慧えの明みようを以もつて、諸もろの痴ち暗あんを
滅めつすべし。世よは実じつに危き脆ぜいなり、牢ろう強ごうなる者ものなし。我わ
れ今いま滅めつを得うること悪あく病びようを除のぞくが如ごとし。此これは是これ応まさ
に捨すつべき罪ざい悪あくのものなり。仮かりに名なづけけて身みと為な
す、老ろう病びよう生じ死じの大海だいかいに没もつ在ざいせり。何なんぞ智ち者しやは之これを除じよ

滅めつすることを得うること、怨賊おんぞくを殺ころすが如ごとくにして、

而しかも歡喜かんぎせざること有あらんや。

汝等なんだち比丘びく、常つねに当まさに一心いっしんに出道しゅっとうを勤求ごんぐすべし。一切いっさい

世間せけんの動不動どうふどうの法ほうは、皆是みなこれ敗壞はいえ不安ふあんの相そうなり。

汝等なんだち且しばらく止やみね、復またた語ものいうこと得うること勿なかれ。時とき

將まさに過すぎなんと欲ほつす、我われ滅度めつどせんと欲ほつす。是これ我わ

が最後さいごの教誨きょうげする所ところなり。

消災呪 しょうさいしゅう

曩謨三滿哆。母馱喃。阿盜囉底賀多舍。娑曩喃怛姪
のーもーさんまんだー もとなん おはらーちいことしゃー そのなんとうじー
他。唵。佉佉。佉呬佉呬。吽吽。入縛囉入縛囉。盜
とう えん ぎやーぎやーぎやーぎやーぎやーきー うんぬん しふらーしふらーしふらーしふらー
囉入縛囉盜囉入縛囉。底瑟陀底瑟娑。致瑟哩致瑟
らしふらーはらしふらーちしゆさーちしゆさー ちしゆりーちしゆ
哩。娑發吒娑發吒。扇底迦。室哩曳娑婆訶。
りー そわじゃーそわじゃー せんちーぎやー しりえいそーもーこー

十句観音経
じつ く かん のん ぎよう

観世音 南無仏
かんぜーおん なーむーぶつ

与仏有因 与仏有縁
よーぶつうーいん よーぶつうーえん

仏法僧縁 常楽我浄
ぶつぽうそうえん じようらくがーじよう

朝念観世音 暮念観世音
ちようねんかんぜーおん ぼーねんかんぜーおん

念念従心起 念念不離心
ねんねんじゆうしんきー ねんねんふーりーしん

舍利禮文

一心頂礼

万徳円満

釈迦如来

真身舍利

本地法身

法界塔婆

我等礼敬

為我現身

入我我入

仏加持故

我証菩提

以仏神力

利益衆生

発菩提心

修菩薩行

同入円寂

平等大智

今将頂礼

甘露門 かんろもん

◇ 奉請三宝 ぶしょうさんぼう

南無十方仏。南無十方法。南無十方僧。

南無本師釈迦牟尼仏。

南無大慈大悲救苦觀世音菩薩。

南無啓教阿難尊者。

◇ 招請発願 ちようしようほつがん

是諸衆等、発心して一器の淨食を奉持して、普く十

方、窮尽虚空、周遍法界、微塵刹中、所有国土の一切の餓鬼に施す、先亡久遠、山川地主、乃至曠野の諸鬼神等、請う来つて此に集まれ、我今悲愍して、普く汝に食を施す、願くは汝各各、我此食を受けて、転じ持つて尽虚空海の諸仏及聖、一切の有情に供養して、汝と有情と、普く皆飽満せんことを、亦願くは汝が身、此の咒食に乗じて、苦を離れて解脱し、天に生じて樂を受け、十方の浄土も、意に随つて遊往し、菩提心を発し、菩提道を行じ、当来に作仏して、

永く退転なく、前に道を得る者は、誓て相度脱せん
ことを、又願くは汝等、昼夜恒常に、我を擁護して、
我所願を滿ぜんことを、願くは此食を施す、所生の
功德、普く以て法界の有情に廻施して、諸の有情と、
平等共有ならん、諸の有情と共に、同じく此福を以
て、悉く將て真如法界、無上菩提、一切智智に回向
して、願くは速に成仏して、余果を招くこと勿らん。
法界の含識願くは此法に乗じて、疾く成仏すること
を得ん。

◇ 雲集鬼神招請陀羅尼

曩謨 步布哩 迦哩多哩 怛他孽多也

◇ 破地獄門開咽喉陀羅尼

唵 步布帝哩 迦多哩 怛他孽多也

◇ 無量威徳自在光明加持飲食陀羅尼

曩莫 薩嚩 怛他孽多 嚩嚩吉帝 唵 三婆羅 三

婆羅吽

◇ 蒙甘露法味陀羅尼

曩莫 蘇嚩頗也 怛佉孽多也 怛爾也佉

唵 おん
蘇嚕蘇嚕 そろそろ
鉢羅蘇嚕 はらそろ
鉢羅蘇嚕 はらそろ
娑婆賀 そわか

◇ 毘廬舍那一字心水輪觀陀羅尼 びるしゃないちじしんすいりんかんだらに

曩莫 のうまく
三滿多 さんまんだ
沒馱南鑊 ぼたなんばん

◇ 五如来宝号招請陀羅尼 ごによらいほうごうちょうしようだらに

南無多宝如来 なむたほうによらい
曩謨 のうぼ
薄伽筏帝 ばぎやばてい
鉢囉步多 はらぼた

阿囉怛曩也 あらたんのうや
怛他孽多也 たたーぎやたや
徐慳貪業福智円満 じょけんどんごうちえんまん

南無妙色身如来 なむみょうしきしんによらい
曩謨 のうぼ
薄伽筏帝 ばぎやばてい
蘇嚕波耶 そろばや
怛佉 たたー

孽多也 ぎやたや
破醜陋形円満相好 はしゅうろぎようえんまんそうこう

南無甘露王如来 なむかんろおうによらい
曩謨 のうぼ
薄伽筏帝 ばぎやばてい
阿蜜唎帝 あみりてい
阿囉 あらん

惹耶じや 怛他孽他たたぎや也や 灌法身心かんぼうしんじん令受快樂りやうじゆけらく

南無なむ広博こうはく身しん如に来よらい 曩謨のうぼ 婆伽筏帝ばぎやばてい 尾布邏孽びほらぎや 怛囉たら

耶や 怛他孽多たたぎや也や 咽喉いんこう広大こうだい飲おん食じき充じゆう飽ほう

南無なむ離怖りふ畏い如に来よらい 曩謨のうぼ 婆伽筏帝ばぎやばてい 阿婆演迦羅あばえんぎやら

耶や 怛他孽多たたぎや耶や 恐怖くふ悉しつじ除じゆり離り餓が鬼き趣しゆ

◇ 発菩提心ほつぼだいしん陀羅尼だらに

唵おん 冒地即多ぼうちじつた 母怛ぼだ 波多野迷はだやみ

◇ 授菩薩三摩耶戒じゆぼさつさんまやかい陀羅尼だらに

唵おん 三昧耶さんまや 薩怛鏖さとばん

◇ 大宝楼阁善住秘密根本陀羅尼

曩莫のうまく 薩縛さらば 怛他た 唵おん 尾補羅びほら 摩羅ぎやら 鉢羅はら 摩ま 尾び

鉢羅はら 怛他た 多た 儺な 捺な 寧に 摩ま 拏に 拏に 蘇そ 鉢羅はら 摩ま 尾び

麼ま 黎れい 娑しや 孽ぎや 囉ら 儼げん 鼻び 嚱れい 吽うん 吽ぬん 入じん 縛ば 囉ら 入じん 縛ば 囉ら 沒ぼ 駄だ 尾び

盧ろ 枳きてい 帝てい 夔く 呬ぎ 夜や 智ち 瑟しゆ 耽つ 多た 孽ぎ 囉ら 陛べい 娑そ 縛わ 訶か 唵おん 麼ま 拏に

縛ば 日れい 哩うん 吽おん 麼ま 拏に 駄だ 哩れい 吽うん 泮ぱ 吒た

◇ 諸仏光明真言灌頂陀羅尼

唵おん 阿あ 暮ぼ 伽ぎや 麼べい 嚕ろ 者しや 娜のう 摩ま 訶か 畝ぼ 捺だ 囉ら 麼ま 拏に 鉢はん 頭ど 麼ま

入じん 縛ば 囉ら 跋は 囉ら 鞞ば 利り 鞞た 野や 吽うん

◇ 回向偈 えこうげ

以い此し修しゅう行あん衆しゅう善せん根げん

亡もう者しゃ離り苦く生さん安なん養よう

俱き蒙もう悔くわい過こ洗せん瑕なん疵すい

報ほう答とう父ぶ母も劬き勞ろう徳て

四す恩いん三さん有ゆう諸し含あん識し

尽じん出しゅ輪りん回ぬい生さん淨じん土ず

存そん者しゃ福ふ樂ら壽じゅ無む窮きゆう

三さん途ず八は難なん苦く衆しゅう生さん

参同契さんどうかい

竺土大仙の心ちくどだいせんしん、東西密とうざいみつに相附あいふす、人根にんこんに利鈍りどんあり、
道どうに南北なんぼくの祖そなし

靈源明れいげんみょうに皓潔こうけつたり、支派暗しはあんに流注るちゆうす、事じを執しゆうするも
元もとこれ迷まよい、理りに契かなううも亦悟またさとにあらざ

門門一切もんもんいっさいの境きよう、回互えごと不回互ふえごと、回えしてさらに相涉あいわた
る、しからざれば位くらいによつて住じゆうす

色しきもと質像しつぞうを殊ことにし声しやうもと楽苦らくくを異ことにす、暗あんは上中じやうちゆう

の言ことに合かない、明めいは清濁せいだくの句くを分わかつ

四大しだいの性しやうおのずから復ふくす、子この其その母ははを得うるがごと

し、火ひは熱ねつし、風かぜは動揺どうよう、水みずは湿うるい地ちは堅固けんご、眼まなこは

色いろ、耳みみは音声おんじやう、鼻はなは香か、舌したは鹹酢かんそ、しかも一一いちいちの法ほう

において、根ねによつて葉分布はぶんぷす、本末ほんまつすべからく宗しゆう

に歸きすべし、尊卑そんぴ其その語ごを用もちゆ

明中めいちゆうに当あたつて暗あんあり、暗相あんそうをもつて遇あうことなかれ、

暗中あんちゆうに当あたつて明めいあり、明相めいそうをもつて觀みることなかれ

明暗めいあんおのおの相對あいたいして、比ひするに前後ぜんごの歩あゆみのごと

し、万物おのずから功あり、当に用と処を言うべ
し、事存すれば函蓋合し、理応ずれば箭鋒挂う
言を承てはすべからく宗を会すべし、みずから規矩
を立することなかれ、觸目道を会せずんば、足を運
ぶもいづくんぞ路を知らん、歩をすすむれば近遠に
あらず、迷て山河の固をへだつ、謹んで参玄の人に
もうす、光陰虚しく度ることなかれ

宝鏡三昧

如是によぜの法ほう、仏祖密ぶつそみつに附ふす、汝今なんじいまこれを得えたり、宜よろしく能よく保護ほうごすべし、銀盃ぎんわんに雪ゆきを盛もり、明月めいげつに鷺ろを蔵かくす、類るいして齊ひとしからず、混こんずるときんば処ところを知る、意こころ言ことに在あらざれば来機らいきまた亦おもむく、動どうずれば窠臼かきゆうをなし、差たがえば顧侍こちよに落おつ、背触はいそくともに非ひなり、大火聚たいかじゆの如ごとし、但ただもんさい文彩あらわに形すなわせば、即ぜんなち染汚ぞくに属やはんししょうめい、天曉てんぎよう不露ふる、物もののためのりに則もちとなる、用しよくいて諸苦しよくをぬく、有う

為いにあらずといえども、是これ語ごなきにあらず、宝鏡ほうきように
のぞんで、形影ぎようよう相あい観みるがごとし、汝なんじこれ渠かれにあら
ず、かれ正まに是これなんじ、世よの嬰兒ようじの五相ごそう完具がんぐするが
如ごとし、不ふ去こ不ふ来らい、不ふ起き不ふ住じゆ、婆ば婆ば和わ和わ、有う句く無む句く、
ついに物ものを得えず、語ごいまだ正ただしからざるがゆえに、
重じゆう離り六りつ爻こう、偏へん正しよう回え互ご、置たんで三さんとなり、変へんじ尽つきて
五ごとなる、莖ち艸そうの味あじのごとく、金剛こんごうの杵ちよのごとし、
正中しようちゆう妙みょう挟きよう、敲こう唱しよう雙なるびあぐ、宗しゆうに通つうじ途とに通つうず、挟きよう帶たい
挟きよう路ろ、錯しやく然ねんなるときんば吉きつなり、犯ぼん忤ごすべからず、

天真てんしんにして妙みょうなり、迷悟めいごに属ぞくせず、因縁いんねん時節じせつ、寂然じやくねんとして照著しょうちよす、細さいには無間むけんに入り、大だいには方所ほうじよを絶ぜつす、毫忽ごうこつの差たがい、律呂りつりよに応おうぜず、今頓漸いまとんぜんあり、宗趣しゅうしゆを立りつするによつて、宗趣しゅうしゆわかる、即すなわち是これ規矩きくなり、宗通しゅうつうじ趣極しゆきわまるも、真常流注しんじようるちゆう、外寂ほかじやくに内揺うちうごくは、繫つなげる駒こま、伏ふくせる鼠ねずみ（繫駒伏鼠けくふくそ）、先聖せんしやうこれを悲かなしんで、法ほうの檀度だんどとなる、其その顛倒てんどうに随したがつて緇しをもつて素そとなす、顛倒想滅てんどうそうめつすれば、冑心こうしんみずから許ゆるす、古轍こてつに合かなわんと要ようせば、請こう前古ぜんこを觀かんぜよ、仏道ぶつどうを成じやうずる

になんなんとして、十劫樹を觀ず、虎の欠たるがごとく、馬の鼻の如し（虎の欠の如く馬の鼻の如し）、下劣あるをもつて、宝几珍御、驚異あるをもつて、狸奴白牯、羿は巧力をもつて、射て百歩に中つ、箭鋒あい値う、巧力なんぞ預らん、木人まさきに歌い、石女たつて舞う、情識の到にあらず、むしろ思慮を容んや、臣は君に奉し、子は父に順ず、順ぜざれば孝にあらず、奉せざれば輔にあらず。潜行密用は、愚のごとく魯のごとし、只能く相続するを、主中の

主しゅと名なづく。

修証義しゆしやうぎ

第一章 そうじよ 総序

生しやうを明あきらめ死しを明あきらむるは仏家ぶつけ一大事いちだいじの因縁いんねんなり、生死しやうじの中なかに仏ほとけあれば生死しやうじなし、但ただ生死しやうじ即すなわち涅槃ねはんと心得こころえて、生死しやうじとして厭いとうべきもなく、涅槃ねはんとして欣ねごうべきもなし、是時このときはじ初めて生死しやうじを離はなる分ぶんあり、唯一ただいちだい大事だいじ因縁いんねんと究尽くわうじんすべし。人身にんしん得うること難かたし、仏法ぶつぽう値おうこと希まれなり、今我等いまわれら宿善しゆくぜん

の助くるに依りて、已に受け難き人身を受けた
るのみに非ず、遇い難き仏法に値い奉れり、生
死の中の善生、最勝の生なるべし、最勝の善身
を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。
無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ち
ん、身已に私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停
め難し、紅顔いざくへか去りにし、尋ねんとする
に蹤跡なし、熟観ずる所に往事の再び逢うべから
ざる多し、無常忽ちに到るときは国王大臣親暱従

僕ぼく妻さい子し珍ちん宝ほうたすくる無なし、唯ただ独ひとり黄こう泉せんに趣おもむくのみ
なり、己おのれに随したがい行ゆくは只ただ是これ善ぜん悪あく業ごつ等とうのみなり。
今いまの世よに因いん果がを知しらず業ごつ報ほうを明あきらめず、三さん世ぜを知し
らず、善ぜん悪あくを弁わきまえざる邪じゃ見けんの党とも侶がらには群ぐんすべ
からず、大おお凡よそ因いん果がの道どう理り歷れき然ねんとして私わたくしなし、造ぞう
悪あくの者ものは墮おち修しゆ善ぜんの者ものは陞のぼる、豪ごう釐りも忒たがわざるな
り、若もし因いん果が亡ぼうじて虚むなしからんが如ごときは、諸しよ仏ぶつ
の出しゆつ世せあるべからず、祖そ師しの西せい来らいあるべからず。
善ぜん悪あくの報ほうに三さん時じあり、一ひとつ者には順じゆん現げん報ほう受じゆ、二ふたつ者には順じゆん次じ

生受しょうじゆ、三者みつ順後次受にはじゆんごじじゆ、これを三時さんじという、仏
祖その道どうを修習しゆじゆうするには、其その最初さいしよより斯三時このさんじの
業報ごつぽうの理りを効ならい験あきらむるなり、爾しかあらざれば
多く錯あやまりて邪見じゃけんに墮おつるなり、但ただ邪見じゃけんに墮おつ
るのみに非あらず、悪道あくどうに墮おちて長時ちやうじの苦くを受うく。
当まさに知るべし今生こんじやうの我身わがみ二つ無なし、三つ無なし、徒いたずら
に邪見じゃけんに墮おちて虚むなしく悪業あくごうを感得かんとくせん、惜おしからざらめ
や、悪あくを造つくりながら悪あくに非あらずと思おもい、悪あくの報ほうあるべ
からずと邪思じゃしゆい惟いするに依よりて悪あくの報ほうを感得かんとくせざるに

は非あらず。

第二章 懺悔滅罪さんげめつざい

仏ぶつ祖そ憐あわれみの余あまり広こう大だいの慈じ門もんを開ひらき置おけり、是これ一切いっさい衆しゆ生じようを証しよう入にせしめんが為ためなり、人にん天てん誰たれか入いらざらん、彼かの三さん時じの悪あく業ごつ報ぼう必かならず感かんずべしと雖いえども、懺さん悔げするが如ごときは重おもきを転てんじて軽きよう受じゆせしむ、又また滅めつ罪ざい清しやう淨じようならしむるなり。然しかあれば誠じよう心しんを専もつらにして前ぜん仏ぶつに懺さん悔げすべし、

恣いん麼もするとき前仏ぜん懺ぶつ悔さんの功徳く力りき我われを拯いて清淨じよう
ならしむ、此この功く徳どく能よく無む礙げの淨信じよう精しん進しんを生長しやうせ
しむるなり、淨じよう信しん一いち現げんするとき、自じ他た同おなじく転ぜ
らるるなり、其その利り益やく普あまねく情じよう非ひ情じように蒙こうぶらしむ。
其その大だい旨しは、願ねがわくは我われ設たと過去かの悪業あく多ごうく重な
りて障しやう道どうの因いん縁ねんありとも、仏ぶつ道どうに因よりて得とく道どうせり
し諸しよ仏ぶつ諸しよ祖そ我われを愍みて業累ごうを解脱だつせしめ、学がく
道どう障ざわり無なからしめ、其その功く徳どく法ほう門もん普あまねく無む尽じん法ほう界かい
に充じゆう満まん弥み綸りんせらん、哀あわれみを我われに分ぶん布ぶすべし、仏ぶつ

祖その往昔おうしやくは吾等われらなり、吾等われらが当来とうらいは仏祖ぶつそならん。
我が昔しやく所造しよぞう諸悪業しよあくごう、皆かい由無始貪瞋痴ゆうむしとんじんち、従身口意之所じゅうしんくいししよ
生しやう、一切いっさい我今がこん皆懺悔かいさんげ、是かくの如ごとく懺悔さんげすれば必ずかなら仏祖ぶつそ
の冥助みようじよあるなり、心念身儀しんねんしんぎ発露ほつろ白びやく仏ぶつすべし、発露ほつろの
力ちから罪根ざいこんをして銷殞しやういんせしむるなり。

第三章 受戒入位じゆかいにゆうい

次つぎには深くふか仏法僧ぶつぽうそうの三宝さんぽうを敬うやまい奉たてまつるべし、生しやうを易かえ
身みを易かえても三宝さんぽうを供養くやうし敬うやまい奉たてまつらんことを願ねがう

べし、西天東土さいてんとうど仏祖正伝そしょうでんする所ところは恭敬くぎよう仏法僧ぶつぽうそうなり。
若しも薄福少徳はくふくしょうとくの衆生しゆじやうは三宝さんぽうの名字な猶なお聞きき奉らたてまつざる
なり、何いかに況いわんや歸依きえし奉たてまつることを得えんや、徒いたずらに所しょ
逼ひつを怖おそれて山神鬼神等さんじんきじんとうに歸依きえし、或あるいは外道げどうの制多せいだ
に歸依きえすること勿なかれ、彼かれは其その歸依きえに因よりて衆苦しゆくを
解脱げだつすること無なし、早はやく仏法僧ぶつぽうそうの三宝さんぽうに歸依きえし奉たてまつ
りて衆苦しゆくを解脱げだつするのみに非あらず菩提ぼだいを成就じやうじゆすべし。
其その歸依きえ三宝さんぽうとは正まさに淨心じやうしんを専もつぱらにして或あるいは如来現在にらいげんざい
世せにもあれ、或あるいは如来滅後にらいめつごにもあれ、合掌がっしやうし低頭ていづ

して口くちに唱となえて云いわく、南無なむ歸依きえ仏ぶつ、南無なむ歸依きえ法ほう、
南無なむ歸依きえ僧そう、仏ほとけは是これ大だい師しなるが故ゆえに歸依きえす、法ほう
は良り薬よくなるが故ゆえに歸依きえす。僧そうは勝しょう友ゆうなるが故ゆえに歸
依えす、仏ぶつ弟子でしとなること必かならず三さん歸きに依よる、何いれずの
戒かいを受うくるも必かならず三さん歸きを受うけて其その後のち諸しよ戒かいを受うくる
なり、然しかあれば即すなわち三さん歸きに依よりて得とく戒かいあるなり。
此この歸依え仏ぶつ法ぼう僧そうの功く徳とく、必かならず感かんの應う道どう交こうするとき成じよう就じゆうす
るなり、設たとい天てん上じよう人にん間げん地じ獄ごく鬼き畜ちくなりと雖いえども、感かんの應う道どう
交こうすれば必かならず歸依きえし奉たてまつるなり、已すでに歸依きえし奉たてまつるが如ごと

きは生生世世在在处处に増長し、必ず積功累徳し、
阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし三
歸の功徳其れ最尊最上甚深不可思議なりというこ
と、世尊已に証明します、衆生当に信受すべし。
次には応に三聚淨戒を受け奉るべし、第一攝
律儀戒、第二攝善法戒、第三攝衆生戒なり、
次には応に十重禁戒を受け奉るべし、第一不
殺生戒、第二不偷盜戒、第三不邪淫戒、第四
不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不説過戒、第

七しち不ふ自じ讚さん毀き佗た戒かい、第八だいはち不ふ慳けん法ほう財ざい戒かい、第九だいく不ふ瞋しん戒かい、第十だいいじゅう不ふ謗ぼう三さん宝ぼう戒かいなり、上じょう来らい三さん歸き三さん聚じゅ淨じょう戒かい、十じゅう重じゅう禁きん戒かい、是これ諸しよ仏ぶつの受じゅ持じしたまう所ところなり。受じゅ戒かいするが如ごときは、三さん世ぜの諸しよ仏ぶつの所しよ証しょうなる阿あ耨のく多た羅ら三さん藐みやく三さん菩ぼ提だい金こん剛ごう不ふ壞えの仏ぶつ果かを証しょうするなり、誰たれの智ち人にんか欣ごん求ぐせざらん、世せ尊そん明あきらかに一いっ切さい衆しゅ生じょうの為ために示しめします、衆しゅ生じょう仏ぶつ戒かいを受うくれば、即すなわち諸しよ仏ぶつの位くらに入いる、位くら大だい覺がくに同おなじし已おわる、真まに是これ諸しよ仏ぶつの子みこなりと。諸しよ仏ぶつの常つねに此この中なかに住じゅう持じたる、各かく各かくの方ほう面めんに知ち覺かくを遺のこ

さ^{ぐんじよう}ず、群生の長^{とこしな}えに此中^{このなか}に使用^{しよう}する、各各^{かくかく}の知覚^{ちかく}に
ほうめんあらわ^{ほうめんあらわ}方面露れず、是時^{このとき}十方^{じつぱう}法界^{ほっかい}の土地^{とち}草木^{そうもく}牆壁^{じやうへき}瓦礫^{がりがく}皆^{みな}仏^{ぶつ}
事^じを作^なすを以^{もつ}て、其起^{そのおこ}す所^{ところ}の風水^{ふうすい}の利益^{りやく}に預^{あずか}る輩^{ともがら}、
皆^{みな}甚^{じん}妙^{みやう}不可^{ふか}思議^{しぎ}の仏化^{ぶつかけ}に冥資^{みやうし}せられて親^{ちか}き悟^{さと}を顕^{あら}わ
す、是^{これ}を無^む為^いの功徳^{くどく}とす、是^{これ}を無^む作^さの功徳^{くどく}とす、是^こ
れ発^{はつ}菩提^{ぼだい}心^{しん}なり。

第四章 発願利生

菩提^{ぼだい}心^{しん}を発^{おこ}すといふは、己^{おの}れ未^{いま}だ度^{わた}らざる前^{さき}に一^{いっ}

切衆生さいしゅじょうを度わたさんと発願ほつがんし嘗いとむなり、設たとい在家ざいけにも
あれ、設たとい出家しゅつけにもあれ、或あるいは天上てんじょうにもあれ、或あるい
は人間にんげんにもあれ、苦くにありというとも楽らくにありと
いうとも、早はやく自未得度じみてくとくせんど先度せんど佗たの心こころを發おこすべし。
其形陋そのかたちいやしというとも、此心このこころを發おこせば、已すでに一いっ
切衆生さいしゅじょうの導師どうしなり、設たとい七歳しちさいの女流にょりゅうなりとも
即すなわち四衆ししゅの導師どうしなり、衆生しゅじょうの慈父じふなり、男女なんによ
を論ろんずること勿なかれ、此これ仏道ぶつどう極妙ごくみょうの法則ほうそくなり。
若もし菩提心ぼだいしんを發おこして後のち、六趣ろくしゅ四生ししじょうに輪轉りんぜんすと雖いえども、

其輪轉そのりんてんの因縁いんねん皆菩提みなぼだいの行願ぎょうがんとなるなり、然しかあれば
従来じゅうらいの光陰こういんは設たとい空むなしく過すごすといふとも、今生こんじょう
の未いまだ過すぎざる際あいだに急いそぎて発願ほつがんすべし、設たとい仏ほとけ
に成なるべき功徳くどく熟じゆくして円満えんまんすべしといふとも、尚な
お廻めぐらして衆生しゅじょうの成仏じょうぶつ得道とくどうに回向えこうするなり、或あるいは
無量劫行むりょうごういて衆生しゅじょうを先さきに度わたして自みずからは終ついに仏ほとけに
成ならず、但ただし衆生しゅじょうを度わたし衆生しゅじょうを利益りやくするもあり。
衆生しゅじょうを利益りやくすといふは四枚しまいの般若はんにやあり、一者ひとつ布ふ
施せ、二者ふたつ愛語あいご、三者みつ利行りぎょう、四者よつ同事どうじ、是れ即すなわち薩さつ

捶たの行願ぎようがんなり、其その布施ふせというは貪むさぼらざるなり、
我物わがものに非あらざれども布施ふせを障さえざる道理どうりあり、其その
物の軽かるきを嫌きらわず、其功そのこうの実じつなるべきなり、然しか
あれば即すなわち一句いっく一偈いちげの法ほうをも布施ふせすべし、此生ししょう
佗生たしょうの善種ぜんしゆとなる、一錢いっせん一草いっそうの財たからをも布施ふせすべ
し、此世しせ佗世たせの善根ぜんこんを兆きざす、法ほうも財たからなるべし、
財たからも法ほうなるべし、但彼ただかれが報謝ほうしゃを貪むさぼらず、自みずから
が力ちからを頒わかつなり、舟ふねを置おき橋はしを渡わたすも布施ふせの檀だん
度どなり、治生産業ちしょうさんぎようもと固こより布施ふせに非あらざること無なし。

愛語あいごというは、衆生しゅじょうを見るに、先まず慈愛じあいの心こころを
発おこし、顧愛こあいの言語ごんごを施ほどこすなり、慈念じねん衆生しゅじょう猶なほ如赤じやく
子しの懐おもいを貯たくわえて言語ごんごするは愛語あいごなり、徳とくある
は讚ほむべし、徳とくなきは憐あわれむべし、怨敵おんてきを降伏げうぶくし、
君子くんしを和睦わぼくならしむること愛語あいごを根本こんぽんとするな
り、面むかいて愛語あいごを聞きくは面おもてを喜よろこばしめ、心こころを楽たのし
くす、面むかわずして愛語あいごを聞きくは肝きもに銘めいじ魂たましいに銘めい
ず、愛語あいご能よく廻天かいてんの力ちからあることを学がくすべきなり。
利行りぎようというは貴賤きせんの衆生しゅじょうに於おきて利益りやくの善巧ぜんぎようを廻めぐら

すなり、窮きゆう龜きを見病雀みびようじゃくを見しとき、彼かれが報謝ほうしゃを求め
ず、唯ただ単ひとえに利行りぎように催もよおさるるなり、愚ぐ人にん謂おもわくは
利り佗たを先さきとせば自みずからが利省りはぶかれぬべしと、爾しかには非あら
ざるなり、利行りぎようは一法いっぽうなり、普あまねく自佗じたを利りするなり。
同事どうじといふは不違ふいなり、自じにも不違ふいなり、佗た
にも不違ふいなり、譬たとえば人間にんげんの如来にょらいは人間にんげんに同どう
ぜるが如ごとし、佗たをして自じに同どうぜしめて後のちに自じ
をして佗たに同どうぜしむる道理どうりあるべし、自佗じたは
時ときに随したごうて無窮むきゆうなり、海うみの水みずを辞じせざるは同どう

事じなり、是この故ゆえに能よく水みず聚あつりて海うみとなるなり。
大凡おおよそ菩提ぼだい心の行願ぎようがんには是かくの如ごとく道理どうり静しずかに思惟しゆいす
べし、卒爾そつじにすること勿なかれ、濟度さいど攝受しやうじゆに一切いっさい衆生しゆじやう皆みな
化けを被こぶらん功徳くどくを礼拝らいはい恭敬くぎやうすべし。

第五章 行持報恩

此この發ほつ菩提ぼだい心しん、多おおくは南閻浮なんえんぶの人身にんしんに發心ほつしんすべ
きなり、今是いまかくの如ごとくの因縁いんねんあり、願生がんしやう此娑婆しやば
国土こくどし来きたれり、見釈迦牟尼けんしやくかにむに仏ぶつを喜よろこばざらんや。

静かに憶うべし、正法世に流布せざらん時は、身
命を正法の為に抛捨せんことを願うとも値うべか
らず、正法に逢う今日の吾等を願うべし、見ず
や、仏の言わく、無上菩提を演説する師に値わん
には、種姓を覩すること莫れ、容顔を見ること莫
れ、非を嫌うこと莫れ、行を考うること莫れ、
但般若を尊重するが故に、日日三時に禮拜し、恭
敬して、更に患悩の心を生ぜしむること莫れと。
今の見仏聞法は仏祖面面の行持より来れる慈恩な

り、仏祖若し単伝せずば、奈何にしてか今日に至ら
ん、一句の恩尚お報謝すべし、一法の恩尚お報謝す
べし、況や正法眼蔵無上大法の大恩これを報謝せ
ざらんや、病雀尚お恩を忘れず三府の環能く報謝
あり、窮亀尚お恩を忘れず、余不の印能く報謝あ
り、畜類尚お恩を報ず、人類争か恩を知らざらん。
其報謝は余外の法は中るべからず、唯当に日日の行
持、其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日日の
生命を等閑にせず、私に費さざらんと行持するなり。

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し、何
れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還し得た
る、徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり、悲む
べき形骸なり、設い百歳の日月は声色の奴婢と馳走
すとも、其中一日の行持を行取せば一生の百歳を行
取するのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきな
り、此一日の身命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形
骸なり、此行持あらん身心自からも愛すべし、自
からも敬うべし、我等が行持に依りて諸仏の行持

見成し、諸仏の大道通達するなり、然あれば即ち
いちにち ぎようじこ しょうぶつ しゆし
一日の行持是れ諸仏の種子なり、諸仏の行持なり。
いわ しょうぶつ しゃかむにぶつ しゃかむにぶつ しゃかむにぶつ しゃかむにぶつ
謂ゆる諸仏とは釈迦牟尼仏なり、釈迦牟尼仏是れ即
しんぜぶつ かこげんざいみらい しょうぶつ とも ほとけ な とき
心是仏なり、過去現在未来の諸仏、共に仏と成る時
かなら しゃかむにぶつ な こ そくしんぜぶつ
は必ず釈迦牟尼仏と成るなり、是れ即心是仏なり、
そくしんぜぶつ たれ
即心是仏というは誰というぞと審細に参究すべし、
まさ ぶつおん ほう
正に仏恩を報ずるにてあらん。

普回向ふえこう

願ねがわくは此この功徳くどくを以もつて、普あまねく一切いっさいに及およぼし、我等われら

と衆生しゅじょうと、皆共みなともに仏道ぶつどうを成じょうぜんことを。

十方三世一切仏じっほうさんせいいつつていぶつ 諸尊菩薩摩訶薩しよそんぶつさもこさ 摩訶般若波羅密まこはんにゃはりらみ

〔略三寶〕

在家略回向

仰あおぎこいねがわ冀さんぼうくは三寶、俯ふして照鑑しょうかんを垂たれたまえ。上じょうらい来らい○
○経きようを諷誦ふじゆす、集あつむる所ところの功徳くどくは、当とう家け家か門もん先せん祖ぞ
代々だいだい一切いっさい精靈しやうれい、六親眷属ろくしんけんぞく七世しちせの父ぶ母も、三さん界がいの万靈ばんれい
等とうに回向えこうし、報地ほうちを莊嚴しやうごんせんことを。

普勸坐禪儀

原ぬるに夫れ、道本円通、争か修証を仮らん、宗乘
自在、何ぞ功夫を費さん。況んや全体迥かに塵埃を
出ず、孰か払拭の手段を信ぜん。大都、当処を離れず、
豈修行の脚頭を用うる者ならんや。然れども、毫釐
も差あれば、天地懸に隔たり、違順纔かに起れば、
紛然として心を失す。直饒、会に誇り、悟に豊かに
して、瞥地の智通を獲、道を得、心を明めて、衝天

の志氣を拳し、入頭の辺量に逍遙すと雖も、幾ど出
身の活路を虧闕す。矧んや、彼の祇園の生知たる、
端坐六年の蹤跡見つべし、少林の心印を伝うる、面
壁九歳の声名尚聞こゆ。古聖既に然り、今人盍ぞ
弁ぜざる。所以に須らく言を尋ね語を逐うの解行を
休すべし。須らく回光返照の退歩を学すべし。身心
自然に脱落して、本来の面目現前せん。恁麼の事を
得んと欲せば、急に恁麼の事を務めよ。
夫れ參禪は静室宜しく、飲食節あり。諸縁を放捨し、

万事ばんじを休息きゅうそくして、善悪ぜんあくを思おもわず、是非ぜひを管かんすること
 莫なれ。心意識しんいしきの運うん転てんを停やめ、念ねん想そう觀かんの測しきり量ようを止やめて、
 作さ仏ぶつを凶とはかはかなこと莫なれ、豈あ坐ざ臥がに拘からんわや。尋常よのつね、坐ざ
 処しよには厚あつく坐物ざもつを敷しき、上うえに蒲團ふとんを用もちう。或あるいは結跏けつか
 跏ふ坐ざ、或あるいは半跏跏はんかふざ跏ふ坐ざ。謂いわく、結跏跏けつかふざ跏ふ坐ざは、先まず右みぎの
 足あしを以もつて左ひだりの腔ももの上うえに安あんじ、左ひだりの足あしを右みぎの腔ももの上うえに
 安あんず。半跏跏はんかふざ跏ふ坐ざは、但ただ左ひだりの足あしを以もつて右みぎの腔ももをお圧おす
 なり。寬ゆるく衣帶えたいを繫かけて、齊整せいせいならしむべし。次つぎに
 右みぎの手てを左ひだりの足あしの上うえに安あんじ、左ひだりの掌たなごころを右みぎの掌たなごころの上うえに

安^{あん}じ、両^{りょう}の大^{だい}拇^ぼ指^し、面^{むか}いて相^{あい}挂^さう。乃^{すなわ}ち正^{しょう}身^{しん}端^{たん}坐^ざして、左^{ひだり}に側^{そば}ち右^{みぎ}に傾^{かたむ}き、前^{まえ}に躬^{くぐま}り後^{しりえ}に仰^{あお}ぐことを得^えざれ。耳^{みみ}と肩^{かた}と対^{たい}し、鼻^{はな}と臍^{ほぞ}と対^{たい}せしめんことを要^{よう}す。舌^{したうえ}上^{あぎと}の腭^かに掛^かけて、唇^{しん}齒^{しあ}相^{あい}著^つけ、目^めは須^{すべ}らく常^{つね}に開^{ひら}くべし。鼻^び息^{そく}微^{かす}かに通^{つう}じ、身^{しん}相^{そう}既^{すで}に調^とえて、欠^{かん}気^き一^{いつ}息^{そく}し、左^さ右^{ゆう}揺^{よう}振^{しん}して、元^{ごつ}元^{ごつ}として坐^ざ定^{じよう}して、箇^この不^ふ思^{しり}量^{りやう}底^{てい}を思^{しり}量^{りやう}せよ。不^ふ思^{しり}量^{りやう}底^{てい}如^い何^{かん}が思^{しり}量^{りやう}せん。非^ひ思^{しり}量^{りやう}。此^これ乃^{すなわ}ち坐^ざ禪^{ぜん}の要^{よう}術^{じゆつ}なり。

いわゆる坐禅ざぜんは習禅しゅうぜんには非あらず。唯ただ是これ安楽あんらくの法門ほうもんなり、
菩提ぼだいを究尽くうじんするの修証しゆしやうなり。公案現成こうあんげんじやう、羅籠未だ到いた
らず。若もし此この意いを得えば、竜りゆうの水みずを得うるが如ごとく、虎とら
の山やまに靠よるに似にたり。当まさに知しるべし、正法しやうぼう自おのずから現前げんぜん
し、昏散こんさん先まず撲落ぼくらくすることを。若もし坐ざより起たたば、
徐徐じよじよとして身みを動うごかし、安詳あんしやうとして起たつべし、卒暴そつぼう
なるべからず。嘗かつて観みる、超凡ちやうばん越おつしやう、坐脱立亡ざだつりゆうぼうも、
此この力ちからに一任いちにんすることを。況いわんや復また、指竿針錘しかんしんつゐを拈ねん
ずるの転機てんき、弘拳棒喝ほっけんぼうかつを拳こするの紹契しやうかいも、未だ是れ

思量分別の能く解する所に非ず、豈神通修証の能く知る所とせんや。声色の外の威儀たるべし、那ぞ知見の前の軌則に非ざる者ならんや。然れば即ち、上智下愚を論ぜず、利人鈍者を簡ぶこと莫れ。專一に功夫せば、正に是れ弁道なり。修証自ら染汚せず、趣向更に是れ平常なる者なり。凡そ夫れ、自界他方、西天東地、等しく仏印を持し、一ら宗風を擅にす。唯打坐を務めて、兀地に礙えらる。万別千差と謂うと雖も、祇管に参禅弁道すべし。何

ぞ自家じけの坐牀ざじょうを抛却ぼうきやくして、謾みだりに他国たこくの塵境じんきょうに去来きよらいせん。若もし一歩いっぽを錯あやまれば、当面とうめんに蹉過しゃかす。既すでに人身にんしんの機要きようを得えたり、虚むなしく光陰こういんを度わたること莫なれ。仏道ぶつどうの要機ようきを保任ほにんす、誰たれか浪みだりに石火せつかを樂たのまん。加以しかのみならず、形しつは草露そうろの如ごとく、運命うんめいは電光でんこうに似にたり。倏忽しゆくこつとして便すなわち空くうじ、須臾しゆゆに即すなわち失しつす。冀こいねがわくは其それ参学さんがくの高こう流る、久ひさしく模象もぞうに習ならつて、真竜しんりゆうを怪あやしむこと勿なかれ。直指じきしたんてきの道に精進じょうじんし、絶学ぜつがく無為むゐの人ひとを尊貴そんきし、仏ぶつの菩提ぼだいに合沓がっとうし、祖祖そその三昧さんまいを嫡嗣てきしせよ。久ひさしく

愆いん麼もなることを為なさば、須すべらく是これ愆いん麼もなるべし。
宝蔵ほうぞう自おのら開ひけて受用じゅよう如意にならん。

食事の偈じき

五観の偈

一には功の多少を計り彼の来処を量る。
ひとつ こう たしやう はか か らいしょ はか

二には己が徳行の全欠を付って供に応ず。
ふたつ おのれ とくぎやう ぜんけつ(と)はか く おう

三には心を防ぎ過を離るることは貪等を宗とす。
みつ しん(の)ふせ とが はな とんとう しゆう

四には正に良薬をこととするは形枯を療ぜんが為なり。
よつ まさ りやうやく ぎやうこ りやう ため

五には成道の為の故に今此の食を受く。
いつつ じやうどう ため ゆえ いまこ じき う

略飯台偈

●食前の偈

若飯食時にやくぼんじきじ

当願衆生とうがんしゆじよう

禅悦為食ぜんねついじき

法喜充滿ほうきじゅうまん

●食後の偈

飯食已訖ぼんじきいこつ

当願衆生とうがんしゆじよう

德行充盈とくぎょうじゆよう

成十種力じようじっしゆりき

平成二十三年八月発行

北海道標津郡中標津町西九条南一丁目三番地



寺

印刷 雨宮印刷株式会社

北海道標津郡中標津町西九条南一丁目三番地
電話(〇一五三)七二―二三三五番